

サッカーにおける守備戦術の変遷について
—プレッシング・フットボールを中心に—

崔 恩郎 長澤 靖夫

キーワード：サッカー プレッシング 守備

A study on tactics and strategic in soccer
— Focused on pressing football —

EunRang Choi Yasuo Nagasawa

Abstract

Today's world soccer has the defence tactics which is called "pressing football" and which is systematized highly. Defense-soccer is imagined from the term "pressing football". Since the speed of a change of offense and defense is required, the motion with much quantity of motion and speed is needed there. In this paper, it does not guard in order to protect the goal, and "pressing football" as positive defense tactics for taking a ball is made applicable to research.

It is the problem whether it protects in the front by continuing applying a press for how formation compact about the flow of a game is maintained as a big subject of the tactics of "pressing football", or to pull and protect.

Key words : soccer, pressing, defense tactics

I. はじめに

世界のトッププレーヤーであっても、サッカーを始めたばかりの子供であっても、それがミニゲームやサッカー遊びであっても、皆ゴールを決めることを目的にプレーをしている。したがって、今日のワールドサッカーは、「プレッシング・フットボール」と呼ばれる高度に組織化されたサッカーが主流となっている。「プレッシング・フットボール」という用語からは、守備的なサッカーがイメージされる。そこでは、攻守の切り替えの速さが要求されるので、多くの運動量とスピードのある動きが必要とされる。まさにボールを奪い取る、奪い返すといったプレスの応酬、守備範囲をコンパクトにし、狭いエリアに大きいなプレッシングをかけることなどが多く見ることができる。プレッシングは、今日のサッカーに不可欠な守備のチーム戦術である。

本論文では、ゴールを守るために守備をするのではなく、ボールを奪うための積極的な守備戦術としての「プレッシング・フットボール」を研究対象とする。「プレッシング・フットボール」という戦術の大きな課題としては、試合の流れについてコンパクトな陣形をどう保つのか、プレスをかけ続け、前から守るか、引いて守るかの問題点である。

II. 研究目的

本研究の目的は、サッカーにおける守備戦術の変遷についての研究である。

初めに、ワールドサッカーあるいは日本サッカー界でも、一般的に使われている「プレッシング・フットボール」という言葉を明確にしようとするものである。

それから、チーム全体の守備戦術としての「プレッシング・フットボール」が、どのように発生し、どのように発展してきたのかを明らかにするものである。

また、今日のサッカーで使われているチームの守備戦術を2006ワールドカップから「プレッシング・フットボール」の映像分析から現状を把握し、それから、自分自身の将来の指導者としての考え方を確立しようとするものであり、「プレッシング・フットボール」の考え方を明確にし、実践に役

立てたいと考えている。

III. 研究方法

研究方法としては、「プレッシング・フットボール」を定義づけるための先行文献の検討。

また、2006ドイツ・ワールドカップの守備戦術を分析対象とする。

IV. 先行研究の検討

「プレッシング・フットボール」に関する先行研究は瀧井の論文に限られている。瀧井は「ワールドサッカーの戦術と戦略」の中で、「プレッシング・フットボール」という守備戦術を昔の攻撃と守備が完全に分かれているサッカーから、全員が攻撃と守備に参加するサッカーへのシステム上の変化について説明し、「プレッシング・フットボール」について、次のように述べている。

「プレッシング・フットボール」では、ゴールを守るために後退して守備を固めるではなく、ボールを奪われたら直ちにボールを奪い返すための積極的なチャレンジが開始され、より相手のゴール近くでボールを奪い返すことが、より積極的な攻撃へとつながるといふ基本戦略に基づいている。相手のボールを持ったプレーヤーを2人、3人で囲い込み、マイ・ボールにしたら、休むことなく一気にゴールを狙うことである。したがって、プレーヤーには、攻守における敏速な数的優位を形成するために、高度な戦術的インテリジェンスに基づくプレーヤー間での判断の同時性と動きの連動性が要求されている。こうしたシステムティックなサッカーは、常にフォワードからディフェンスライン間の距離を30-40mのコンパクト状態に保つ(スモール・フィールド)ことで可能となる。

V. サッカーの守備戦術

戦術は、相手に打ち勝つための「戦う術」のことである。つまり、自分で持っている技術を駆使して、攻撃の目的や守備の目的を達成するための

手段である。

サッカーの守備戦術では、個人戦術、グループ戦術、チーム戦術がある。

個人戦術とは、それぞれの場面におけるプレーヤー一人ひとりプレーの可能性のことである。その目的は、相手に打ち勝つ、1対1に勝利するということである。

グループ戦術は、守備は最終的に1対1の戦いになることが多いのであり、その戦いをより有利に展開するために、グループとして個人戦術要素を効果的に組み合わせ、味方と協力して相手と戦う手段のことである。

チーム戦術は、個人、またグループ戦術を効果的に組み合わせ、チーム全体の連携をとり、試合の主導権をコントロールするための手段のことである。

本研究では、守備のチーム戦術をマンマーキング、ゾーンマーキング、プレッシングと分類する。

VI. 「プレッシング・フットボール」とは

本論における「プレッシング・フットボール」というものを定義として明確にしようとするものである。

プレッシングは、今日のサッカーにおいてチームとして不可欠な守備の戦術である。「プレッシング・フットボール」という用語は日本のサッカー界の中でも一般的に使われている。しかし、論文としては、瀧井敏郎の文献のみである。

6.1 瀧井の「プレッシング・フットボール」

先行研究の瀧井によると、「プレッシング・フットボールでは、ボールを奪われたら自陣深く後退し守備をするのではなく、直ちにボールを奪うための積極的なチャレンジが要求され、ボール保持者を挟みこむ、あるいは囲い込む、プレッシャーをかけボールを奪い取るといった敏速な連携プレーを指している。」と要約することができる。

6.2 ドイツ・サッカーの「プレッシング・フットボール」

ドイツ・サッカー協会編集の「21世紀のサッカー選手育成法(ディフェンス編)」の中では、「プレッシングは一つチームの守備形式であり、ボールから離れたプレーヤーも含めて全員が幅と厚みをもってポジションをとり、ボール保持者にパスもドリブルも許さないようにするという戦術である。」と述べられている。

6.3 本論における「プレッシング・フットボール」

これらのことから、「プレッシング・フットボール」という戦術は、ボールを奪われたら直ちに相手のボール保持者に厳しいプレスをかけ圧迫感を与えて、プレーをするスペースをコンパクトにし、ドリブル突破やパスを防ぎ、組織的に人数をかけて積極的にボールを奪い、ゴールを決めることを最大の目的とする守備の戦術だと定義する。

VII. 「プレッシング・フットボール」への変遷について

サッカーの戦術はワールドサッカーと共に進歩してきた。本論では、「プレッシング・フットボール」を中心として研究するため、「プレッシング・フットボール」の原点と考えている「トータル・フットボール」から変遷について述べる。

1974年西ドイツ大会では、革命的なサッカーが生まれた。オランダのヨハン・クライフは、ハンガリーの戦術4-2-4の攻撃陣からを1枚減らすことで、意図的にスペースを作り、ディフェンスを1枚引っぱり出すことに発展させた。これが「トータル・フットボール」というチームとして全員が攻撃に参加し、守備に参加するサッカーである。これによって、世界のサッカーは戦術と戦略としても劇的な変化をした。「トータル・フットボール」というサッカーの新たな戦術は、従来までのポジションの概念を完全にくつがえすものである。

本論では、「プレッシング・フットボール」も、この「トータル・フットボール」から進歩したと考える。

時代の流れと共に「トータル・フットボール」は進化し、相手に時間をより与えないよう、守備範囲をコンパクトにして狭いエリアに大きな圧迫をかけて、相手の攻撃を崩す、あるいはボールを

奪い返して自チームのリズムに変えて試合の主導権を奪うサッカーとなった。

1982年スペイン・ワールドカップにおいて、ダブル・フォワードが主流となり、3-5-2システムが登場した。このシステムは、中盤を固める“攻撃的なサッカーへの回帰”と評された。両チームが3-5-2システムを採用すると、単純に中盤は10人のプレーヤーがひしめき合い、共にボール保持者へのプレッシャーは強くなるのが特徴的であった。

オランダが見せた「トータル・フットボール」と同様に、ハンガリーのリヌスは1983年に自らのサッカーを「プレッシング・フットボール」と呼んでいた。それから、ACミランやアヤックスによる「プレッシング・フットボール」は、明確なチーム戦略に基づくシステマティックなサッカーにより、ボール保持者へのプレッシャーを強め、時間的・空間的余裕を奪う戦術を使って見せた。

1990年以降、守備戦術はディフェンスのラインコントロール、ダブル・ボランチやマンマークなどからマークを受け渡すエリアサッカーに変化してきた。

その2年後、1992年から日本ではオフト監督が指揮をとり、日本のサッカー戦術は、「トライアングル」、「アイコンタクト」や「スモール・フィールド」などの言葉を浸透させた全員が守備と攻撃に参加するサッカーを作り上げた。さらに、加茂監督にバトンタッチして、エリアを小さくし、フィールドを4分割にして、その中でサッカーができるようにする。具体的には、サイドに追い込んで、ボールをとるという明確な戦術を打ち出した。これは、同時にゾーンディフェンスと言われ、日本の「プレッシング・フットボール」の原点になった。

戦術というのはパターン化して、相手に分ってしまうと対策をとられ、負けてしまうものである。そして岡田監督に引きつがれ、フラット3のトルシエ、放任主義のジーコからオシムとなった。

リベロが深いポジションをとればとるほど、相手側のプレーヤーがオフサイドにかかることなく、自由に走り込めるスペースは大きくなる。さらに、相手のダブル・フォワードに対して2人のディフェンダーが、マンツーマン・マーキングに忠実であればあるほど、意図的にダブル・フォワードが2人のディフェンダーを引き付けることで、

後方からオフenseが走る込むためのスペースを前線に創りだすことができるのである。そこで、リベロは浅いポジションをとるようになり、守備の方法も攻撃側の意図的なスペース作りを阻止するために、ゾーンマーキングを採用するようになった。トルシエ日本代表チームの代名詞となった“フラット3”は、こうした戦略史の流れから生まれた。さらに、ディフェンダーには、ラインコントロールにより攻撃側にオフサイドトラップを意識させ、自由にスペースに走りこませないようにすることが課せられている。このラインコントロールこそが、トルシエ日本代表チームが採用するフラット3の生命線であると言える。4人のディフェンダーによるシステムも同様に“フラット4”と呼ばれている。

両チームのディフェンスラインが、押し上げられ、中盤に配置されるプレーヤーの数が増えたことで、必然的にプレッシャーの強いサッカーへと発展してきたのである。

1998年フランス・ワールドカップで、相手のゴール前からプレスをかけたり、早めにプレスを仕かけ30メートルから40メートルの狭いスペース内にプレッシングをかける「コンパクト・フットボール」とも呼ばれるようなサッカーとなった。

フランス大会では、より高いレベルの組織力、チームディシプリンがさらに強調され、リスクを負わないという概念が加わり、成熟した組織による「トータル・フットボール」が展開された。

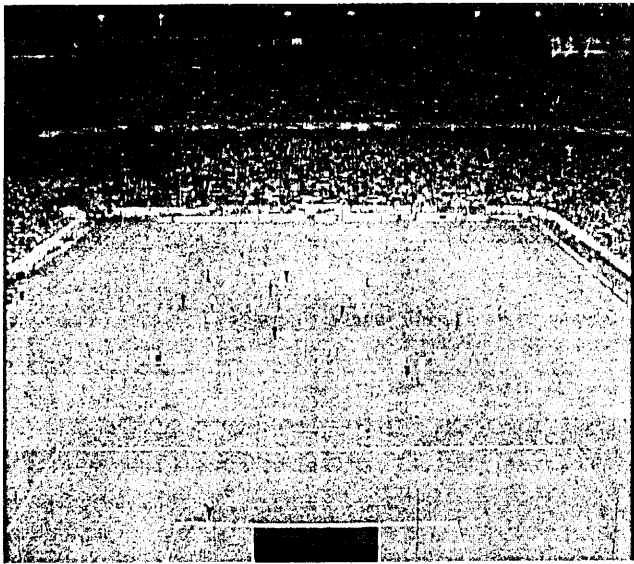
さらに、2006ドイツ・ワールドカップで、世界のサッカーでは、さらにコンパクトなスモール・フィールドで戦うスピーディーなサッカーに進化した。常に、速い攻守の交替とコンパクトなプレーが特徴として挙げることができる。2006ドイツ・ワールドカップでは、常に厳しいプレスをかける試合が観察された。完全にフリーなパス、あるいは完全にフリーなドリブルを観察することはなかったと言っても過言ではない。

これまでが、本論における守備戦術としての「プレッシング・フットボール」の変遷である。

VIII. 「プレッシング・フットボール」の構想転換

本章では、「プレッシング・フットボール」に対しての新しい考え方を説明する。

下の写真は 2006 ドイツ・ワールドカップでのプレッシングの例として最も一般的なシーンと考えられる。



写真から見るとゴールキックに対して両チームのプレーヤー全員が中盤のセンターラインに集まっているのが明らかである。

8.1 両チームのプレーヤーが中央に

次の図 1 は、守備範囲をコンパクトにして狭いエリアに大きなプレスをかけて、ボールを奪うことを目的とした形式が見られる。

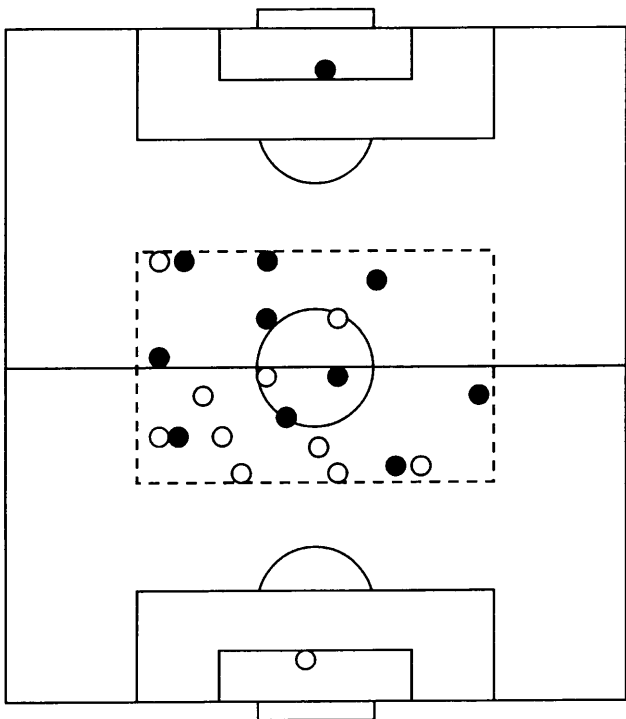


図 1

図 1 は、写真のように白チームのゴールキックに対して黒チーム全員が縦と幅を 30-40m に位置して、コンパクトな守備形式をとっている。これは、相手チームにプレーするスペースを与えないようにしているものである。

8.2 ゾーンからラインへの構想転換

ドイツのサッカーでは、プレッシングを三つの形式に分類して、下の図 2 のように、フィールドを三つのゾーンに分解している。

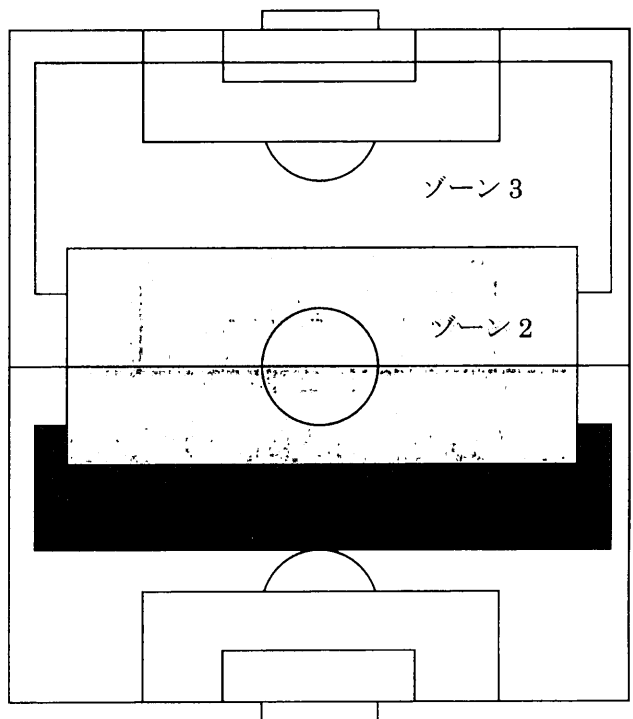


図 2

図 2 のように、ゾーン 1 は、守備のプレッシングであり、ハーフウェーラインから自陣ゴール前約 20m の距離までのゾーンで自チームのプレーヤー全員が自陣ハーフに引いて守備をするのである。

ゾーン 2 は、中盤のプレッシングであり、フィールドの中央の 1/3 で縦約 30-40m である。自チームのフォワードは、ハーフウェーラインの前方約 15m で、相手の攻撃に対応する。ディフェンスラインは自陣ゴールの前方約 30m 前に上がって、守備をするのである。

ゾーン 3 は、攻撃のプレッシングであり、ハーフウェーラインから相手のゴールラインまでのゾーンで自チームの全員が上がって、相手のハーフ

フに完全に押し込めて守備をすることを意味している。

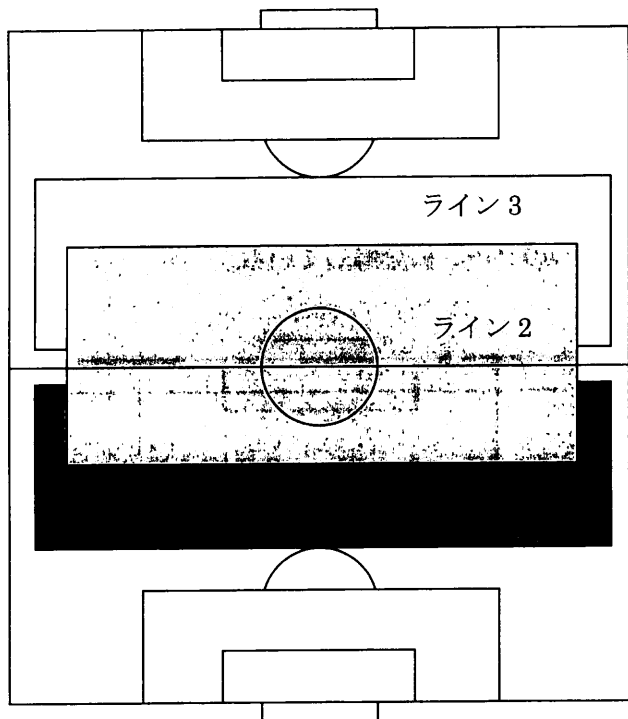


図 3

図 3 は、本論におけるラインとしてのプレッシングの図である。フィールドのゾーン分割は、チーム戦術を調整する際の方向づけの目安となると考える。しかし、プレッシングは固定的なものではなく、フィールドの中で流動的な三つのライン（4-4-2 あるいは 4-3-3 などのライン）に対するプレッシングと考えることができる。

図 3 のように、ライン 1 は、相手のフォワードラインに対してのプレッシングであり、ライン 2 は、オフラインに対してのプレッシングであり、ライン 3 は、ディフェンスラインに対してのプレッシングである。

動いている相手プレーヤーがディフェンスラインでボールを持っている場合に、自チームの全員が相手のディフェンスラインを中心に対してプレスをかけ、ボールを奪うことである。相手の中盤にボールが渡ろうとしている場合に、自チームの全員が相手の中盤のプレーヤーを中心に対してプレスをかけコンパクトすることである。また、相手のフォワードにボールが渡ろうとしている場合に、全員が相手のフォワードラインに対してコンパクトすることである。つまり、相手にボールが奪われた瞬間から自チームの全員が同時に守備をすることであり、どのゾーンにおい

ても相手のラインに対してプレッシングをかけていると理解できる。フィールドのどのゾーンにおいても、相手の各ラインに対して、意識的にプレッシングをかけることができる。

以上のことから、フィールド上の三つのゾーンに対するプレッシングという考え方から、三つのラインに対するプレッシングへの構想転換が必要となってくる。

8.3 4 分割から 6 分割への構想転換

フィールドの分割とフィールド中でシステム上のラインに対しての分割は、トレーニング上も、研究上でも「プレッシング・フットボール」を理解するための手段であり、コンパクトなサッカーの理解に向けた目安になるものである。

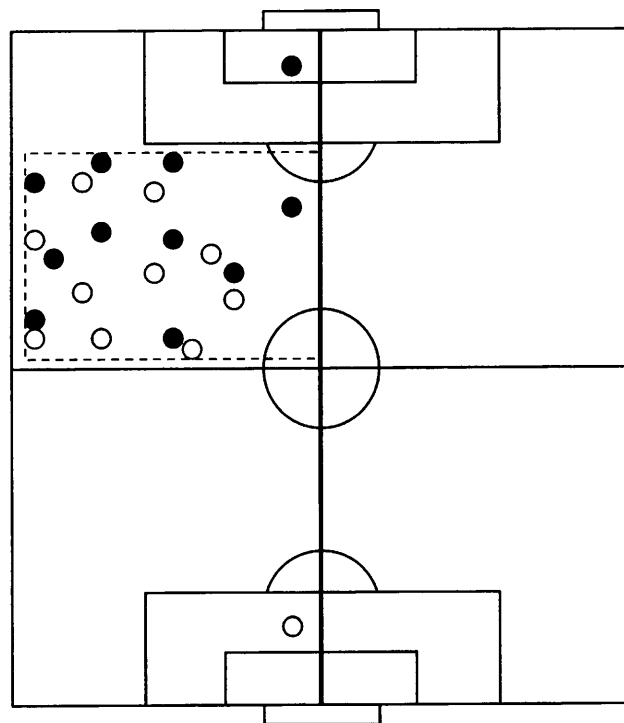


図 4

これまでも、1994 年加茂監督が上の図 4 のように、ハーフウェーラインとゴールとゴールの中心を結んだ黒い線でフィールドを 4 分割するという戦術を打ち出した。相手チームをサイドに追い込んでボールを奪い取るという戦術であり、それが、日本の「プレッシング・フットボール」の原点と言われている。

そして、2006 ドイツ・ワールドカップから見るとそれよりももっとコンパクトにし、スピーディー

なサッカーになってきた。

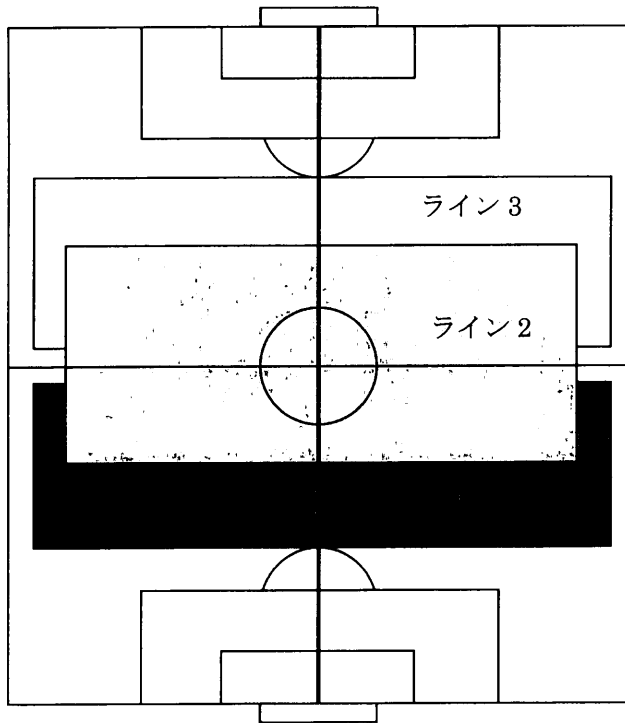


図5

それからのことから、本論では、図5のように流動的な三つのラインを加茂監督の例にならってフィールドを縦に2分割し、結果として流動的な6分割することによって、よりコンパクトな「プレッシング・フットボール」に対応する分析が行うことができると考える。

IX. まとめ

サッカーの戦術はワールドサッカーと共に進歩している。2006 ドイツ・ワールドカップでの試合分析から見ると、プレッシングは、今日のサッカーにおいてチームとして不可欠な守備の戦術であることがはっきりと見せた。ハイ・プレッシャーの下では、優雅にパスを何本もつないでいる余裕などなく、相手守備陣が整う前にボールを奪い攻撃に転じる。こうした攻撃は、常にゴールから逆算したダイレクト・プレーが要求され、ゲーム展開はスピーディーでダイナミックなものとなっている。

本論文では、日本のサッカー界の中で一般的に使われている「プレッシング・フットボール」という守備戦術を試合の分析を通して、これまでで

上に明確にすることができた。

チームとしてのプレスを効果的に使い試合をコントロールするため、チームの守備戦術としての「プレッシング・フットボール」は、フォワードを含めて全員が守備に参加しなければならない。また、試合を通してプレスをかけ続けることは不可能であり、前から守るか、引いて守るかを状況により判断をして、チーム全体が意思統一し、周期的にプレスをかけていくのが「プレッシング・フットボール」の課題点である。

今後の課題は、試合分析の方法として、ラインの中央と両サイドに分割する分析方法が、より理解を深めることができることが示唆された。よりコンパクトな「プレッシング・フットボール」の分析と理解をするためには、三つのラインに対して、フィールドを縦に3分割する方法がより守備戦術を分析する上で有効であると考えられる。しかし、本論での分析では、この9分割による十分な分析考察がなされたとは考えていない。

また、トレーニングや指導の現場において、コーチとプレーヤーが容易に理解することができると思われる。したがって、今後は9分割による戦術の分析研究を進めていきたいと考えている。

引用・参考文献

- 1) 浅見俊雄他:最新サッカー百科大事典. 大修館書店. 2002
- 2) ジェラルド・ウリエ&ジャック・クルボアジェ・小野剛&今井純子訳:フランスサッカーのプロフェッショナル・コーチング. 大修館書店. 2000
- 3) ゲロ・ビザンツ他・田嶋幸三監訳・今井純子訳:21世紀のサッカー育成法. 大修館書店. 2002
- 4) 前田秀樹:サッカーの戦術&技術. 新星出版社. 2004
- 5) 宮彦彦他:日本一わかりやすいサッカーの教科書. 成美堂出版. 2006
- 6) ラルフ・ペーター・田嶋幸三監訳・今井純子訳:21世紀のサッカー選手育成法[ディフェンス編]. 大修館書店. 2006

7) 菅野淳・星川佳広:強くなるためのサッカー
フィジカルトレーニング. スキージャーナル
社. 2004

8) 下田哲朗:図解オシムの練習. 東邦出版
社. 2007

9) 須田芳正:フットサル攻略マニマアル 100.
日本放送出版協会. 2002

10) 瀧井敏郎・福井哲・湯田秀行・三笠裕史・内
田裕之:東京学芸大学紀要 第 5 部門 第 39
集. 1987

11) 瀧井敏郎:ゲームの運動観察-サッカーに
おける写真によるゲームの運動観察-. スポーツ
運動学研究 2. 1989

12) 瀧井敏郎:ワールドサッカーの戦術. ベー
スボールマガジン社. 1995

13) 瀧井敏郎・木下直洋:サッカーの戦術&戦
略. 体育の科学 Vol. 52 NO. 5 2002

14) 瀧井敏郎・槍山康:ワールドサッカーの戦
略. JJBSE10(2). 2006

15) トニー・カー・岩崎龍一訳:プレミアム流
サッカー・コーチング-問題を決める 100 のトレ
ニング-. ランダムハウス講談社. 2007

16) 湯浅健二:戦うサッカー理論. 三交社:東
京. 1995